

観光舟運を利用した都市再生に関する考察

日本大学 学生会員 ○五内川 譲

日本大学 正会員 吉川 勝秀

1. はじめに

近年、都市の水辺環境に対しての関心が高まっているが、都市再生に水辺が積極的に使われている事例はまだ多くない。そこで、本研究では、観光舟運と都市の関わりに着目し、国内外の河川の事例調査、国内のものについては現地調査を行った。また、日本橋川での舟運に関する社会実験に参加し調査を行った。今回の報告は、これらの調査結果と社会実験を通しての舟運を用いた都市の活性化について考察したものである。

2. 舟運の事例による研究

1) 日本の事例

現在、日本の都市において、内陸舟運はあまり利用されていないが、近年、舟運が見直され始め、都市の中の河川でも様々な舟運が利用されるようになった。今回は首都圏における代表的な河川について調査を行った。

①隅田川(写真-1)

昭和初期、非常に汚れていた隅田川だが、現在では水質も改善されると共に、観光舟運が盛んになった。また、河川沿線には緩傾斜型堤防(スーパー堤防)の整備が行われると共に都市の整備が行われた。現在、川から都市を見る代表的な河川になっている。



写真-1 (左：スーパー堤防 右：観光舟運)

②日本橋川・神田川(写真-2)

日本橋川は兩岸が直立護岸で、上空が高速道路に覆われている代表的な都市河川である。水質は環境基準に達しているが、下水処理の匂いがある。

神田川は日本橋川と分岐する川であり、下流には屋形船の停泊地がある。また、ゴミの輸送も行われている。



写真-2 (左：日本橋川 右：神田川のゴミ運搬船)

③旧中川(写真-3左)

水門によって水位がコントロールされている区間では河畔のリバーウォークなども整備されている。また、和船の運航も行われている。

④荒川(写真-3右)

石油のタンカーが航行する河川である。また、多くの防災船着場があり、また、最近整備された荒川ロックゲートには人々がその様子を見に来るなど、賑わいを見せている。



写真-3 (左：旧中川の河畔 右：荒川ロックゲート)

⑤道頓堀川(写真-4)

水質改善と共に、上下流に水門を設置して水位を一定に保つことによって水面に近いところにボードウォークが整備された。また、道頓堀川には利用される舟もでてきた。



写真-4 (右：道頓堀川のリバーウォーク 左：道頓堀川の舟運)

2) 海外の事例

海外の代表的な観光舟運としてサンアントニオ川とタイ・バンコクの水上市場を事例として挙げた。どちらも河川を貴重な都市の中のオープンスペースとして利用した観光資源となっている。

①サンアントニオ川(写真-5)

都市の中を流れるアメリカのサンアントニオでは、治水対策として上流のダムを設置し、蛇行した河川の直線化をした。その直線化された区間が年間約1千万人に利用されている。その後さらに地下にトンネル放水路を設け、水位は下流の水の力で操作している。その約1kmの蛇行区間には、カフェやレストランなどがあり利用さ

キーワード 観光舟運 観光舟運の再興 水面利用

連絡先 〒274-8501 千葉県習志野台 7-24-1 日本大学理工学部 水環境システム研究室 TEL/FAX047-469-5228

れている。また、観光船が運航している。

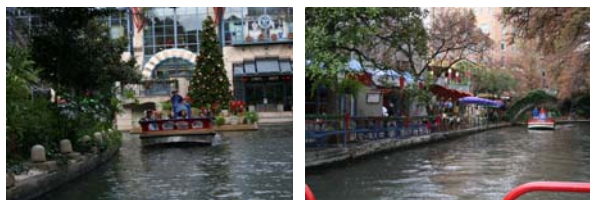


写真-5 (右: 観光船運 左: 河畔の様子)

②タイの水上マーケット

タイの水上マーケットはかつて住民の生活の場として、現在は観光面で利用されている。



写真-6 タイの水上マーケットの様子

3. 社会実験

11月3日にNPO法人都市環境研究会が主催した都市での舟運再生に関する社会実験を行った。日本橋川と神田川において実際に舟に乗り、都市河川における舟運を体験してもらい、参加者に舟運や都市河川のイメージや今後の舟運に必要なものについてなどのアンケート調査を行った。その結果は以下のとおりである。

1) 都市河川のイメージについて

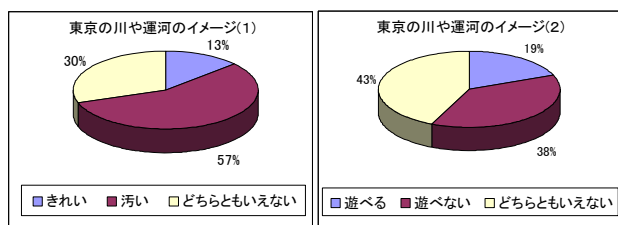


図-1 東京の河川や運河のイメージについて(左: 水質 右: 遊ぶことの可、不可)

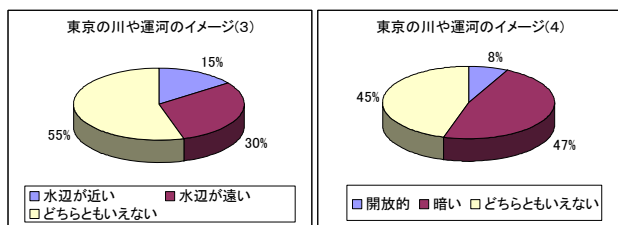


図-2 東京の河川や運河のイメージについて(左: 水辺の身近さ 右: 開放感について)

都市河川のイメージは図-1、2から汚い、遊べない、水辺が遠い等の割合が多いことからあまりいいイメージがないことがわかる。

これらは日本橋川が下水処理の過程に発生する匂いや、高速道路や直立護岸によって閉鎖的な空間であることか

ら感じるものであると考えられる。

2) 社会実験の感想(複数回答可)

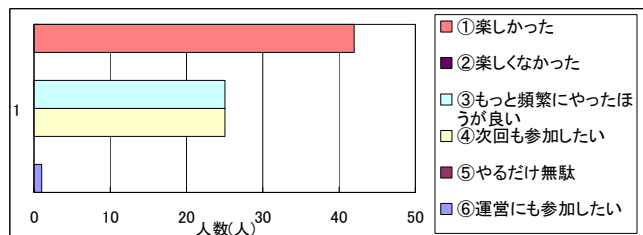


図-3 社会実験後の感想について

図-3 より社会実験の感想のほとんどが賛成的なものが多く、否定的なものはなかった。

3) 参加者が観光舟運開発に必要と考えられるもの

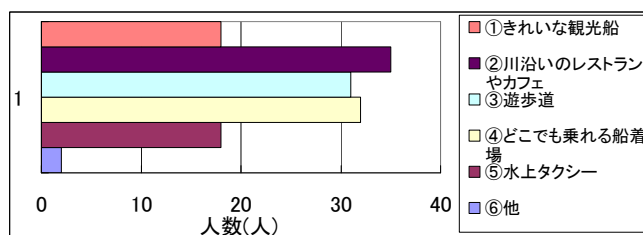


図-4 今後の観光舟運に必要なもの

図-4 に示すように社会実験の参加者が考える観光開発に必要なものとしては、様々なものがあるが、水辺を楽しめる施設の整備を望んでいることがわかる。

4. 結論

日本の事例から舟運は近年見直されてきており、都市の河川でも様々な舟運が見られるようになってきている。また、世界の事例から川は都市の中で生活空間の一部として水辺の利用がなされている。今後、日本で舟運を活性化させた都市再生や観光産業を起こすことが求められていると考えられる。

また、社会実験から、都市河川の水辺のイメージはよくないことがわかった。しかし、実際に日本橋川で舟に乗っている人々は、また参加したいなど舟運に対して良いイメージを持っていた。今後の河川環境の整備は舟運を利用することが水辺に近づくことのきっかけになると考えられる。また、舟運の利用を考慮した整備が必要になってくるのではないのかと考えられる。今後、日本橋川等の舟運を含めた川からの都市再生について考えて行きたい。

なお、本研究は株式会社エコーの江上和也氏、日本大学理工学部の秋山智氏と共同で行ったものである。

<参考文献>

- 1) 尾田栄章、セーヌに浮かぶパリ、東京図書出版会、2005年
- 2) 吉川勝秀、河川流域環境学、技報堂出版、2005年